〔萬葉集抄一〕伊勢國風土記云、○中略天日別命、神倭磐余彥天皇○神武自彼西宮征此東州之時、隨天皇○中略天日別命奉勅東入數百里、其邑有神、名伊勢津彥、天日別命問曰、汝國獻於天孫哉、答曰、吾覓此國、居住日久、不敢聞命矣、天日別命發兵欲戮其神、于時畏伏啓云、吾國悉獻於天孫、吾敢不居矣、天日別命令問云、汝之去時、何以爲驗、啓云吾以今夜起八風、吹海水、乘波浪、將東入、此則吾之却由也、天日別命、令整兵窺之、比及中夜、大風四起、扇擧波瀾、光耀如日、陸國海與朗、遂乘波而東焉、古語云、神風伊勢國、常世浪寄國者、蓋此謂之也、

〔日本書紀三神武〕戊午年十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之粮、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、是役也、天皇志存必克、乃爲御謠曰、伽牟伽筮能、伊齊能于彌能、於費異之珥夜、○下略

〔萬葉集一雜歌〕和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌、
山邊乃、御井乎見我氐利、神風乃、伊勢處女等、相見鶴鴨、

〔古事談一王道后宮〕延喜聖主臨時奉幣之日、出御南殿、本自有風、把笏着靴欲拜之間、風彌猛、御屛風殆可顚倒、被仰云、穴見苦ノ風ャ、奉拜神之時、何有此風哉云々、卽刻風氣俄止云々、

〔枕草子九〕風は　あらし、こがらし、三月ばかりの夕暮に、ゆるく吹たる花かせ、いとあはれなり、八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風、いとあはれ也、雨のあしよこざまにさはがしう吹たるに、夏とをしたるわたぎぬの、あせの香などかはきすゞしのひとへにひきかさねてきたるもをかし、此すゞしだに、いとあつかはしうすてまほしかりしかば、いつのまにかう成ぬらんと思ふもをかし、あかつき、かうし、つま戸などおしあげたるに、嵐のさと吹わたりて、かほにしみたるこそ、いみじうをかしけれ、九月つごもり、十月一日の程の空うちくもりたるに、風のいたう吹に、黄なる木の葉どものほろ〳〵とこぼれおつる、いとあはれ也、

〔袋草紙三〕俊頼歌云　しなのなるきそ地のさくらさきにけり風のはふりにすきまあらすな